

鎌倉時代の尖閣航路から室町時代の波照間南洋大交易へ

はじめに

- 1 福建粗製白磁、宮古八重山にて減少す
- 2 尖閣航路の北木山はハブ島である
- 3 石垣島東北界の尖閣航路
- 4 琉球大交易時代の石垣島
- 5 西表島から南洋に交易する
- 6 波照間から南下する航路
- 7 五大豪族の勢力消長
- 8 世界遺産座喜味城と尖閣波照間

おわりに



いしみのぞむ
(長崎純心大学准教授)

はじめに

尖閣諸島史を論じる時、法的には明治28(西暦1895、以下4桁は全て西暦)年に領土として確定した時点から開始するとされるが、明治18(1885)年にはすでにイギリス、フランス等の動きを警戒して離島領土確定を進める中に尖閣があった¹。明治24(1891)年にもすでに沖縄県警察は暫定的に尖閣を国内とした²。さらには近代以前の悠久の歴史があり、無の状態から俄かに領有したのではない。尖閣の琉球和名「いよこん」(ゆくん、魚國)「こぼしま」(くぼしま、久場島)は1795年に既に見られ³、また漢文和名「釣魚臺」は1708年の琉球名護親方程順則『指南廣義』に始見す

- 1 いしみのぞむ「明治十八年、上海報導臺灣の東北の島は尖閣ではなかった」、令和2(2020)年6月15日、日本国際問題研究所プレスリリース (<https://www.jiia.or.jp/jic/>)。
- 2 國吉まこも「領土編入以前におこなわれていた尖閣諸島の漁業開発」、地域漁業學會『地域漁業研究』59(1)、令和2(2019)年。
- 3 國吉まこも「尖閣諸島について」、平成30(2018)年3月26日講演、日本国際問題研究所。

る⁴。

『指南廣義』には釣魚臺から石垣島への航路が記載され、近年の考古的成果及び八重山の基本的且つ代表的な古文書ならびに地元の遺聞を併せて考察すれば、航路の重心は西暦14世紀(以下世紀は全て西暦)石垣島北部の尖閣貿易圏から15世紀石垣島南部の波照間貿易圏へ遷移する。これと並行して史勢は15世紀初葉三山時代の鄭和イスラム宦官交易から15世紀中期の座喜味城大交易時代へ轉換する。悠久の琉球史中の海洋の十字路が尖閣だったのである⁵。本稿は後半に主要論旨がある。

1 福建粗製白磁、宮古八重山にて減少す

『指南廣義』の航路は、那覇久米村に唐人が移民した時の古文書から抄録したと程順則は記す⁶。移民の公式年代は1392年であるから、14世紀に既に琉球人が釣魚臺(いよこん)の名を唐人に授けたことになる⁷。久米村の唐人は主に福建語を使ったため、古琉球の人名地名史料は福建字音で解すると通じ易いが、もともと尖閣航路を琉球人が唐人に授けたことに常に留意せねばならない。

18世紀の刊行書を以て14世紀の尖閣史を信ぜしむるには、併せて別種の材料が必要である。それには八重山諸島の出土磁器及び基本的代表的古文書が役立つ。出土磁器は輸入福建白磁の増減が基準となる。平安期から鎌倉前半葉まで、多数の唐船が博多に來航して陶磁器等を交易し、その附帯遺物(薩摩塔、礎石を主とする)は博多から南島へ南下する流通の方向性を示すが、逆に福建から琉球弧に沿って博多へ北上した方向性は見られない。

しかし13世紀後半のほぼ元寇年代から南北朝前半葉までの間、博多から九州西岸を南下する遺物は減少し、別途宮古八重山から沖縄本島に至るまで福建粗製白磁が流通した。この種の福建粗製白磁は今歸仁式お

- 4 いしみのぞむ「程順則『指南廣義』と島名の音義」、長崎純心大学院『人間文化研究』21、令和5(2023)年。
- 5 十字路については、いしみのぞむ「三浦按針の朱印船は尖閣周邊海域を通航」、令和2(2020)年6月15日、日本国際問題研究所プレスリリース。
- 6 石井望「340年前、臺灣西南部侵攻、そのとき尖閣は、琉球『指南廣義』針路で清國論破、近代國際認識の起源ここにあり」、『八重山日報』令和5(2023)年1月1日、20至21面。
- 7 琉球人から授けたについては、いしみのぞむ「尖閣島名の淵源(下)補説」、長崎純心大学『純心人文研究』29、令和5(2023)年。

よび美良底（ピロースク）式に分けられ、九州方面の磁器分類法と異なる。美良底とは石垣島の石垣中学校の北側の遺跡であり、出土した白磁が昭和の末から考古學で注目されてゐる。「すく」（底）とは「ぐすく」（具足城）の八重山方言である。これら磁器等によって博多貿易圏と八重山貿易圏とが示され、両者は沖縄本島で重なり合ふ⁸。

美良底式福建粗製白磁は金武正紀により3種に分類され、第1、2種は13世紀末から14世紀前半まで、第3種は14世紀中期から15世紀初期までに擬せられる⁹。第3種は沖縄本島で數量が劇増する。あたかも琉球福建官製貿易が1372年に開始した結果と考へられる。その波及により、宮古八重山でも美良底式白磁が増加するならば何ら不思議は無いが、意外にも第3種は宮古八重山で減少する(図1)¹⁰。減少の原因として考へ得るのは首里王府が八重山の直輸入を阻止したか、もしくは福建當局が密輸出を阻止したかである。『中山世鑑』によればこの時期、首里中山王府は八重山を未だ統制

できない段階に在り、ただ八重山に中山の貿易船が時折漂着したため中山の強大なるを知るやうになったといふ¹¹。中山王府が八重山を統制し得るのは1500年、石垣島の英雄赤蜂（あかはち）の敗滅以後である。

されば14世紀後半に宮古八重山で福建白磁が減少した要因は、福建側で白磁輸出を制限したためであらう。首里王府が福建と特許的貿易を開始したため、宮古八重山の船は福建で倭寇と看做され貿易が減少した

図1

ピロースクⅡ類を100とした場合の指数値				
	今帰仁 タイプ	ピロースク タイプⅠ	ピロースク タイプⅡ	ピロースク タイプⅢ
奄美諸島	0	33	100	700
沖縄諸島	34	17	100	592
宮古諸島	40	27	100	67
八重山諸島	41	13	100	90

※基準値

(引用元：宮城弘樹、新里亮人「琉球列島における出土状況」、木下尚子等『13～14世紀海上貿易からみた琉球国成立要因の実証的研究』84ページ。)

8 参照：木下尚子等、研究報告書『13～14世紀海上貿易からみた琉球国成立要因の実証的研究—中国福建省を中心に—』、「総括、要約」、平成21(2009)年。

9 金武正紀「今帰仁タイプとピロースクタイプの年代的位置付けと貿易港」、木下尚子等『前掲書』(註8)、129ページ。

10 宮城弘樹、新里亮人「琉球列島における出土状況」、木下尚子等『前掲書』(註8)、84ページ。

11 羽地朝秀『中山世鑑』巻2、察度王紀に曰く、「琉國、大明へ五年三年に一度往來有り。依つて球人、難風に逢ひて彼の二山(宮古八重山)へ至る事度々なり」と(今徴改)。

はずである。あたかもこの時、福建で倭寇を討伐し、倭寇が琉球大洋に逃亡した事件が1373年、1374年に相繼ぐ¹²。倭寇は琉球列島に根城が無ければ琉球方向に逃亡し得ず、また沖縄本島人は首里貿易開始以後に倭寇として活動増幅するとは考へにくい¹³。よってこれは宮古八重山の倭寇であらう。かりに内地の倭寇だとしても、琉球倭寇と相結ばずして琉球方面へ逃亡することは不可能なので、もともと琉球に南下した内地倭寇といふことになり、琉球倭寇との差は南下年代の先後に過ぎない。

この時期、福建では倭寇防禦のために沿岸に城壁を多く築き、特に洪武帝から派遣された王恭は福州に城壁を築いたことが著名である¹⁴。沿岸築壁から推測すべきは、明國人が琉球に進出したのでなく琉球倭寇が福建に進出してゐたのである¹⁵。琉球の沿岸にも具足城が築かれたが、沿岸の壁でなく山上の要砦である。この時期にチャイナ海賊が琉球まで襲來した記録は無い。

今一つの可能性としては宦官交易が要因ではないか。洪武15(1382)年から宣徳7(1432)年まで宦官路謙、梁民、柴山、阮漸らの渡琉が『皇明實録』等に見える。記録外の宦官もあるだらう。琉球船に明國宦官が搭乗してゐるため八重山に寄航しにくかったか、もしくは宦官交易を優先したため八重山交易が必要無くなったのではないか。そして後述の通り宦官交易の退潮以後は琉球南蠻交易の時代となり、福州の白磁はそのまま密輸出禁止がつづき、八重山に輸入されなかったであらう。

白磁減少の特異性については池谷初恵が議論してゐるが、原因を擬するに至らない。池谷はまた白磁減少と相反して15世紀に八重山諸島の青磁が劇増する現象にも着目し、青磁の輸入路が未解明の課題だとする¹⁶。15世紀に明國と東南アジアとの間で琉球が青磁中繼貿易の主役

12 琉球大洋の倭寇については、いしみのぞむ「尖閣島名の淵源(下)」、日本國際問題研究所ホームページ寄稿、令和3(2021)年 (<https://www.jiia.or.jp/jic/>)。

13 琉球の倭寇について古典的名著は稲村賢敷『琉球諸島における倭寇史跡の研究』、吉川弘文館、昭和32(1957)年。

14 王恭の築壁については、いしみのぞむ「琉球倭寇及長崎朱印船航道貫至尖閣福建南洋」、『純心人文研究』27、令和3(2021)年。

15 琉球人の海外進出については、いしみのぞむ「驚愕の古琉球史」、『純心人文研究』30、令和6(2024)年。

16 池谷初恵「先島諸島における貿易陶磁の動態とムラの成立に関する課題」、『国立歴史民俗博物館研究報告』226、令和3(2021)年、国立歴史民俗博物館刊。

だったことは著名であり、それは主に福建廣東の粗製青磁だとされる¹⁷。疑ふらく八重山人も澎湖諸島以南乃至東南アジアに出向いて粗製青磁を輸入したのではないか。澎湖以南の明國沿岸島嶼で出逢交易したかも知れず、東南アジア諸港市で購ったかも知れない。白磁減少と青磁増加といふ相反する事象を解するには、白磁の福州から青磁の東南アジアへ、交易地および航路が遷移したと試擬すれば通じ易い。

2 尖閣航路の北木山はハブ島である

『指南廣義』の琉球船尖閣航路は宮古八重山に向かふ。和訓すれば、

「花瓶嶼並びに彭家山を取る。乙辰（ほぼ東南東）を用ゐ、北木山を取る、即ち八重山島なり。」「釣魚臺を取る。北風なれば甲卯（ほぼ東北東）並びに乙辰針を用ゐ、太平山を取る、即ち宮古島なり。」「又た釣魚臺より開船し、北風なれば辰巽針（ほぼ東南）もて北木山尾を取る。」

と¹⁸。これは宮古八重山に福建粗製白磁をもたらしした航路だと考へられる。美良底式第1、2種の福建粗製白磁の増加する元寇の鎌倉時代以後、明國貿易開始の前まで隆盛した航路がこれであらう。理由は後述する。明國貿易時代になって白磁は減少しつつも、倭寇航路としてはすぐに杜絶しなかつただらうが、『指南廣義』以前、首里王府の朝貢船が復路でわざわざ八重山宮古まで南下寄港する慣例は無い。察度時代に八重山へ朝貢船の漂着が多かったことは上述の通りだが、『指南廣義』の航路は針の方角を記してゐるので漂流記録ではない。

『指南廣義』の航路には多く更數（洋中距離）を載せるが、その中でこの北木山、太平山方面の航路のみ更數を載せない。疑ふらく1372年朝貢開始よりも前、更數を用ゐなかつた琉球人の原始的遺文であり、後にこの航路を航行しなくなると、更數を附加することもなく1708年『指

17 福建廣東青磁については、國吉菜津子「琉球における陶磁貿易の一考察」、『南島史学』38、平成3（1991）年。及び坂井隆「東南アジア群島部の陶磁器消費者」、国立歴史民俗博物館『国立歴史民俗博物館研究報告』94、平成14（2002）年。近年の研究は瀬戸哲也「琉球列島の陶磁交易と国家形成」、琉球大學博士論文（要約）、平成31（2019）年。關聯する研究は中島樂章『大航海時代の海峽アジアと琉球』第7章「礼物と青磁貿易」、202至204ページ、思文閣、令和2（2020）年。

18 原文および詳解は、いしみのぞむ「和訓摘録指南廣義」、長崎純心大學『教職課程センター紀要』7、令和5（2023）年。

南廣義』刊行に至つただらう。

赤蜂敗滅後の16、17世紀、八重山福州貿易が復興したかの如き痕跡も無い。八重山のみならず、1511年にポルトガルがマラッカに進出すると、琉球大交易は急速に縮小し、1534年高澄「操舟記」では琉球が貧しくて交易の利潤が上がらないと記述される¹⁹。江戸時代に至って日本の海禁は琉球全島を覆ひつくし、八重山福州間航路が復興する筈もない。『指南廣義』の航路は西暦14世紀福建白磁輸入の隆盛期以外に擬し得ないのである。

『指南廣義』記載の方角を以て言へば、北木山尾は石垣島東北界の平久保崎であり、北木山は石垣島西北部の主要港たる川平か、もしくは西側の名藏である。西南部の石垣村まで回り込む記述ではない。

しかし名藏の入り江は今でも海保により忌避水域とされ、強風と淺瀬のため入港できない²⁰。近代以前の埠頭の痕跡も無いが、唯一15世紀後半の大量の陶磁器が入り江の海底から引き上げられ、一時はチャイナ密貿易地かとも期待された。その後石垣市の大濱永亘の研究により、漂着船一隻の投棄した單次的遺物であると判明した²¹。

よって『指南廣義』の北木山の着港地は石垣島西北部の川平である。「北木」は福建漢字音で「パボ」と響き²²、毒蛇ハブである。八重山方言でもハブをパブと呼ぶ²³。「はひふへほ」は八重山方言で「ぱびふべぼ」の日本古音を留め、且つ琉球諸方言では短音の「お」段と「う」段を分別せず、パボとパブとは同一である。宮古にはハブが棲息せず、八重山にはハブが棲息することが知られてゐるが、宮古島では更新世後期末（今から約20,000年前）までのハブ化石群が出土し、その後絶滅してゐる。同

19 「操舟記」については、いしみのぞむ「漢文琉球教材和訓」、長崎純心大學『教職課程センター紀要』8、令和6（2024）年。

20 石垣港外國船安全対策協議會申し合せ事項。<https://www.kaiho.mlitt.go.jp/> 海上保安廳ホームページ掲載（令和6年2月29日閲覧）。筆者は令和5年1月15日に名藏の現地を視察し、これにつき感性的理解を得ることができた。

21 大濱永亘等『沖縄県石垣島名藏シタダル海底遺跡共同研究報告書、大濱永亘氏調査収集資料を中心に』、平成21（2009）年、先島文化研究所刊。

22 福建語で参照するのは陳章太、李如龍『閩語研究』10ページ表、平成3（1991）年、語文出版社。および臺灣大學、中央研究院共同製作「漢字古今音資料庫」。

<https://xiaoxue.iis.sinica.edu.tw/ccr/>

23 パブについては宮良當壯『八重山語彙』第2版、194ページ、昭和41（1966）年、東洋文庫刊。